

夜を行く

昔、支那の詩人が、「深夜こそすべてを生かす」と言っているが、深夜はすべての形象をそれぞれに生かし、鋭くし、大きくしている。

犬がくる。どこから彼はきたのか。森を通つて、私の方へ急いで、まるで駆けるようにしてくる。吠えはしまいかと恐れたけれど、吠えもせず、じつと私を見て行き過ぎた。岸辺づたいにいく彼の姿を見送っていると、犬と私とが、この真夜中の野原で、ふと目と目を見かわしたということが、一種不可思議な、物凄いのちに思われてくる。

風が吹く。その音をじつと聞いている。葉から葉へつたわり、石を吹き、波のように荒れて高まり、無数の小さなささやきと共に、森の方へ押し寄せていく。

じつときいてると恐ろしい。どこか森とした世界へ行きつくような気がする。そこは無情な、だが「長しえの国」であるように思われる。毎日毎日くだらない見栄や、争いや、偽わりの中で暮していることが情けなく思われる。

年は過ぎ、星は移り、遂に死ぬ。死ぬまでに何をすべきか。無方針な、ふしだらな、良

三十一

心を偽わり何かへ阿ねた生活をつづけたままで、死んでしまふにちがいない。

しかし、それもまたよからう。何をしたとて、別に偉いわけでもあるまいから。ただそうした生活にたえきれないということさえないならば。

太陽の輝きはなつかしい。けれど、現在ではそれすら一種の媚薬のようにしか思われな。この峻烈な媚薬は、物の表面を照らし、惑わし、人の心を虚栄へ、虚礼へと駆り立てる。真昼の町は醜い。家の中はなおさらである。

それに比べて、何と深夜の寂しくも傷ましいことか。ここではあらゆる哲学と死を見、細長い川と光る月を知る。

岡を下りて、程遠い森の中へと歩いた。ふと「お化け」というもののことを思った。森の中の歩行は物凄く、恐ろしい。木々の間に何ものかの潜んでいるのが見えるような気がする。色々な幽霊の絵や話を思い出すが、それがまさまさと恐ろしい。けれどこの恐ろしさに、どこまでも突き入って進んで行きたい気がする。

この心、この心には勝利の感が伴う。生きて生き抜く。「自己」を主張し抜く。そのさきがどうなろうと、それは神様の思召しにまかせる。

金光教の教理を面白くきいた。それは非常に単純であり、愉快であつた。それは一口にいつてみれば、自然にまかせて生きるので、心に曇りがない。……

しかし、修養のない私どもは、まだなかなかそういう境地には達しられぬ。ただ、私に次のような「弱者の哲学」がある。心に重荷が積もり、その傷のうづくとき、私はエゴイ

ストになる。私はあらゆるものを、そしてすべての負担を無責任に放り出す。人が何とおうと構わない。そうすることによつてのみ、弱者は行くての道を新しく踏み直していくことができるのである。

低地に霧がうかび、火玉のように、静かにほうつ、ほうつと飛んでくる。月は最高の座から下界を照らしている。

「何処へ行こうか」

うっかり口に出して言つたが、

「自然の美も私を慰めない」

という軽い不満が心に起こつた。しかし私は、怯るまずに先へ先へと川岸を歩き出した。

恋愛と性欲

これから書くことは、恋愛と性欲との関係（それは私の恋愛論の骨子をなしている）における私自身の独創と、その独創を樹立するに至つた動機についてである。

二

われわれが恋愛思想史を見るならば、「恋愛と性欲との関係如何」ということが、最も重要な研究対象とせられてきたことを知るであらう。が、今日までのところ、恋愛現象は人間社会における特殊現象であるという説（ひいてそれは人間社会にあつても最も教養ある人々のみが味わうことのできる精神的現象であるという説）が、多かれ少なかれわれわれの世界を支配している。共産主義恋愛観の樹立者コロンタイにせよ、二重結婚論の提唱者ラッセルにせよ、「恋愛現象は高度の教養ある人格にもとづく心霊的現象である」と考えている。その故に、一つはプロレタリアートが高度の教養を獲得するまでの期間、擬

似恋愛のやむなきを言い、他の一般問題としての恋愛外の男女関係を重視し、優生学的に善導すべしと説いている。

さて恋愛現象がかくの如く人間社会もしくは教養ある階級における文化的現象であるとするれば、性欲現象はどうなるのであるか。いうまでもなく、それは動物的本能なのだ。大体こういうような思想——それに接した時、私はたちまち非常な不満と懷疑とを感じたのである。なぜならば、もし恋愛が教養ある者によつてのみ味わいえられるものとするれば、われわれ無教養の者は無恋愛の境遇にあまんずるはかはない。だが、恋愛とはいったい何か。果してそれは教養から生まれたものであるか。文化的現象であるか。更に一步進んで、「恋愛現象が人間社会における特殊の現象であるというのは果して事実であるか」

三

一寸考えれば何でもないことのようにであるが、恋愛に関する前述のような特殊の見方は、階級社会的恋愛観の根底をなすものであり、しかもそれを生殖行為と一致せしめんがためには、非常に多くの矛盾をおかすに至る。そこで私は是非ともこの説に反対して立たねばならぬと考えた。そしてここから種々の仮説が引き出されるに至つたのである。

その第一、

「恋愛現象は人間社会におけるのみの特殊の現象ではない。それは性欲現象と同時に芽生え、相並んで性を形作っている極めて原始的（もし性欲がそうであるならば）の機能であ

二十四内

る」

然らば恋愛とは何か。いわく、牽引——性の相牽く状態である。

また性欲とは何であるかといえ、それは牽引の次の瞬間における結合の内部を意味するものである。かくの如く、いかなる生物にも、性欲行為あるところには必ず恋愛行為があり、恋愛行為あるところにはまた必ず性欲行為のあることを認めねばならない。一般動物には性欲行為のみがあつて恋愛行為はないなどというが如き、私はこれを肯ずかぬものである。

こう考えてくるうちに、私は自ら訊ねなければならなくなつた。「もし恋愛が人間のみにあるのでなく、他の原始的の生物にもあるものとすれば、恋愛なるもの、つまり牽引なるものは、相互の心情をもととしてなされるものではないことが想像される。ではいかにして？」

この問いは私をかなり窮地に追い込んだ。けれど私は考えた。「心情とか心霊とかいうものは、恋愛の意識的助力者として派手な役割をつとめる。故に恋愛はあたかもそれから生まれたかの如くである。けれど元来、それらと恋愛とは別種のもので、恋愛はあくまでもそれそのものの中に目的を内在する一つの原始的機能である」

しかし、そうだとすれば……。私はここで医家の説を思い出した。いわく、「人間に限らず一般生物を卵と精虫とに還元して、その牽引の作用がいかにして行われるかを見ると、それは静止せる卵と、運動する精虫とによつてであることは共通の事実である。然らば精

虫は何によつてその運動を開始するか。銀杏の精虫は蟻酸と称する物質のある方に向つて運動するというのである。その如くに、各精虫は、その種類に従つて、各々好む物質もしくは刺激（例えばある一定の光線、温度、溶液等）があり、それを追求してその方に集まる。いうまでもなく卵細胞にそれがある。それは精虫を牽くための飾りとしてであるよりは、卵細胞それ自身の内部的成育が、たくましくして自然に精虫の好むそれを構成するのである」

この医家の説は、心情によらざる雌雄牽引の内容を証明するものとして、私は取り敢えずこれをとることにした。いわく「恋愛は心情から生まれたものではない。心情は恋愛を意識するという役割をもつだけのもので、恋愛は早く一つの物質的機能として存在している。その機能は精虫の能動的追求と、卵子の受動的選択とを仲介とするものである」

これが第二の仮説である。ここで念のため言っておきたいことは、恋愛即ち牽引は、かくの如く種々の仲介物（物質および作用）を必要とするけれどもそれは飽くまでも仲介物であつて、恋愛そのものはそれとは別なものであるということである。また、追求と選択の二様式は、私においては性の「優劣」においてではなく、「関係」において認められるもので、この点ウオードのそれとはなはだ立場を異にしている。

即ち雄性と雌性とが異なる性を有するものであるならば、その各性体の運動方法も、また自ら異なるものがある。そしてそれを仲介として、牽引という事実が、具体的に証明されるのである。もつとも雄性が能動的追求、雌性が受動的選択という運動の方法は、かな

主和介

り陳腐なものかの如くである。もし私の要求——即ち牽引という事実を具体的に証明する材料として、何らそれに代わる新発見があれば、私は直ちにそれを受け入れるにためらわないであらう。このような仮説によつて、私は恋愛現象を人間社会におけるのみの現象ではなく、一般生物の性生活中、性欲現象と相並んで存在するものであると主張し、故に恋愛は教養ある階級のみが味わいうるなどという意見に対して一矢を酬いたのであつた。

四

しかしながら、問題はこれからである。何となれば「恋愛と性欲との関係如何」について、また「その各々の機能如何」については、少しの解決すらもついてはいない。

ところがこの問題を研究しようとするに當つて、私はまたここで一つの不満に突き当たつたのである。それは「恋愛現象は教養から生まれる」といつている人々が、必ず他面にあつては「恋愛と性欲との機能が結局同一性質のものである」ことを言い、その上げ句、生殖至上の功利主義的思想に囚われ、性欲も恋愛も、その実践に當つては、生殖至上の立場からの自覚（理性）によつて統一されねばならぬとしていることである。この態度に対して先駆的の示唆となつたのはショウベンハウエルであるといわれ、科学的、思想的背景となつて助長したのはダーウィン、ウオードの二者であるとすべく、総括的に受け入れて近代恋愛観を大成したものは即ちエレン・ケイである。以下それについて少し言つてみたい。

いつたい恋愛と称せられるいわゆる精神的現象は、何から出てきたものかという問いに對しては、性欲醇化説——即ち性欲の醇化したものだという答えをする人や、性欲昇華説——性欲が昇つて花と開いたものだという考えを抱いている人などがある。が、根本において、いずれも性欲に根ざすと見ている点で同じであるといつてよい。ショウベンハウエルも「恋愛は性欲の空華である」といつている。こうした見方が、近代恋愛観の特徴の一つである。醇化であれ昇華であれ空華であれ、性欲を根底すると考える場合、その機能または目的が、結局性欲に帰着し、さらに生殖に還元するであろうことはいうまでもない。ショウベンハウエルは、非常に分りやすくそれを説明している。

「恋というものはいかに空虚に彩られても、その根底は性欲にあるのである。個々の男女は各々自分の幸福を得んがために、相恋しつあると思つてゐるが、実は種族の詐謀に欺かれてゐるのである。恋は美の感覚によつていつでも導かれてゐる。即ち人はまず一番美しい個体を最も好み強く望む。しかし、美しい個体とは、種族の性格が最も純潔に現われているものに他ならない。それに次いで自分には欠けてゐるところを完全に持つてゐるものや、また不完全でも自分に反對した相手を美しいと思つて恋するが、その実これは種族の感覚であるに過ぎない。そしてそれらの目的とするところは、種族の永続の目的になう小児を生まんとすることである」

この説はたいへん分りやすいし、未だに非常な勢力をもつてゐる、ばかりでなく私の知つてゐる限りでは、幾多の修正は加えられたにせよ、根本的にこの説を覆えした恋愛思

三十五 肉

想は、今日に至るまで見当らないのである。

加うるに、あたかもダーウィンの進化論と、ウォードの女子中心説が現われて、生殖至上の意識はいよいよ焚きつけられた。そしてこのダーウィンの進化論と、ウォードの女子中心説との、直接的影響のもとに出發したのは、さきにもいつたようにエレン・ケイである。

エレン・ケイは進化論の影響によつて、人類社会の不斷の向上を信じ、その向上の有力な基礎たるべきものは、婦人がより善き子孫を生殖するために努力する——その努力の中にありと考へた。また、女子中心説の影響は、彼女をして母性の権利ということを叫ばせた。

エレン・ケイ思想の骨子は右の二説につきてゐる。故に彼女を批判する立場にある私の批判の対象が、常にそれであることももちろんである。殊に「権利」という意識を裏づけての女子解放——または性解放思想は、全然に階級社会的のものに他ならない。それはあたかも生産者本位といつたようなものである。それについては、本誌創刊号「我国マルクス婦人の頭脳拝見」の中でいつてゐる。

「エレン・ケイは母性の権利という。それは母性は種族の中心であるという考えから出ている。しかし、母性が種族の中心で、男子が枝葉かの如くであるのは形の上のこと、種属に寄与するものは母性のみではない。すなわちいずれが多く種族にとつて必要であるか（重要であるか）などという比較論は成り立たない。母性であることを、何かお手柄で

もあるかの如く煽て上げたのは、従来の支配者的の不純な動機からである。ケイの思想には大部分それがつきまとうている。我々新しい時代の婦人は、母性の権利などとはいわない。母親が子を生育することは、母親個人からいえば一定期間における生理的現象である。また人類社会からいえば、人類社会が連带的にもつ自然現象である」

事物を広く関係的に見る、その時に我々は我々の存在とそれに属する作用とを知るであらう。しかしながら、これらのことは、漫然とはどうでもいえるし、批判の目的も達しられない。

五

女子中心説——いい換えれば生殖至上説を覆さんとせば、その拠つてきたる進化論的思想を無意味化し、それと共に生殖なる現象が、何等重要なものでなく、単なる機械的現象にしか過ぎない所以を明らかにすべきだと思う。こうした無意味的思想の中にあつては、権利などという主張は全然なく、幾度もいうように事物はただ関係においてのみ見出されるのである。

私がエレン・ケイを批判するに當つて、まず考えたことはこれであつた。私はまず進化とは何かと考えた。従来いわれているそれは、唯心的なると、唯物的なるとを問はず、事物のたえまなき向上を意味している。向上？果してそうであるか。事物は向上しつづけるか。もしあるとしても、向上とは何か。誰が、何を標準として、向上、向下なる判断を

三十一

下すのであるか。——徹頭徹尾それは主観の範囲を出ないものではないか。この際、我々が最も厳密ならんとせば、不可知論をとるほかはない。だが、今、私はそうしてはならない。なぜなら私は、エレン・ケイを批判するために、反対概念を必要としているのである。かくて、私はここでまた二つの仮説をもつに至つた。その一つは「事物は限りなく進化したつあるかの如くである。しかしながらそれは向上への秩序的段階を意味するものではなく、消滅への順次的運動に他ならない」

進化が向上のためでなく、事物の消滅を目がける機械的運動であるとすれば、従来進化する言葉がもつた百パーセントの意味は冷却する。

さて他のもう一つの仮説は、「生殖とは何か」ということに関するものである。生殖とは何か。種属を永く保存せんがための作用である、というのが一般の意見であり、然ればその事業を天職とする母性は崇めらるべきであるというのであるが、これを「生殖はそれ自らの中に種族消滅への矛盾要素をもっている」とすれば生殖現象なるものが明らかに一つの機械的現象にしか過ぎないこと、即ち子を生むということや生まないということには、元本何等価値の相違はなく、すべては同じことだという無意味観に帰着する。

右のような無意味観に立つた時にのみ、私は進化論的、女子中心的エレン・ケイを批判することが出来るのである。即ち私は、男女愛は「種族保存のためのものである」という従来の思想に固く反対し、男女愛は「種属保存の形式による種族消滅への作用である」と考えるに至つたのである。

だが、それらのことも、もちろん漫然といわれるべきではない。何故に男女愛の中に、種族消滅の萌芽があるか？ それはいかにしてあるか？

ここで私は、再び恋愛と性欲との関係に帰らねばならない。人々は恋愛と性欲とはその機能、目的等において、結局同一（即ちショウベンハウエルがいうようにすべては子供を生むことに還元せられる）と考えている。しかしながら私は「恋愛には恋愛の機能があり性欲には性欲の機能がある」とする。その目的も截然と違った二つのものであると。

いわく「恋愛とは何か。男女の一体化への欲求——即ち渾然たる性的無差別もしくは超差別の境地を目がけるものである」「性欲とは何か。子孫を生むことを目的とするのである」

この二つは各々立場を異にし、目的を違えているにもかかわらず、しかも離るべからざるものである。何となれば、それは相互的に作用し合うことによつて、恋愛は自己の意志——即ち男女愛の究極は、子孫を生むことでなく、その終ることであることを表示するに對し、性欲はそれと反対に抜かりなく生まんとしてゐるのである。かくてこの戦いの最後まで性欲は自己の意思を弱めつつも遂行するが、その矢つきた瞬間に、同じく最後まで自己を表示しつづけた恋愛が登場して、人類の挽歌を歌うのである。

もつとも種族の消滅などということは、性に基づいてのみ考えらるべきものではないこ

三十六内

ともちろんであるけれども、ここでは私の仮説を、こんなに述べねばならなかつたからである。

以上説いてきたことを総括すると、「恋愛と性欲とは、生物の性生活の最初から最後まで相並んで存在するもので、決して一方が文化的現象、他方が動物的现象などということはない」ということ、また「恋愛と性欲とは各々機能と目的を異にすることによつて、性生活を豊富にしているもので、恋愛は性欲の醇化したものだとか、故に結局性欲に還元して考えらるべきだとかいうのは、間違っている」ということ、従つて「そうした間違いに根底を置く生殖至上説もしくは女子中心説は否定さるべきである」、そしてその否定はそれの背景をなす「向上的進化観を無意味ならしめることによつて可能となる」、即ち言いかえれば、我々が恋愛と名づけ、性欲と称している現象——それはただそれ自身あるがままに解釈すべき現象であつて、何等意味というものはあり得ない。他の現象がそうであるように、これらの性的現象もまた、発生し消滅する機械的現象の一つにしかすぎないというのである。

然らば我々は何故に婦人の立場からとか、生殖の立場からとか称して、それらの性生活を研究しようとするか。いわく、それは子孫への、もしくは生殖への奉仕のためではなく、我々自身の性生活の自然ならんことを希望するが故にある。